論　文

福建僑郷における郷村建設と経済開発

——福建省晋江市龍湖鎮の華僑援助——

石　田　　浩

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．晋江市の華僑・華人
　1．晋江農民の外国移民
　2．地域開発に対する華僑・華人の貢献
　3．晋江県帰国華僑聯合会の歴史と役割
　4．晋江県帰国華僑聯合会歴代主席のプロフィール
Ⅲ．華僑・華人の公益事業と営利事業
　1．龍湖鎮の華僑・華人と龍湖鎮帰国華僑聯合会
　2．龍湖鎮での公益事業
　3．龍湖鎮での営利事業
Ⅳ．華僑・華人の郷村建設
　1．龍湖鎮各僑村の建設状況
　2．龍湖鎮出身の有力華僑・華人の公益事業投資
Ⅴ．結　　語

Ⅰ．はじめに

アジア経済の比重が高まり，「21世紀はアジアの世紀」だとか，「中国の世紀」であると，盛んにマスコミで取り上げられるようになった。世界経済が低迷する中で，中国のみが2桁台の経済成長を続け，その中国を取り巻くアジア太平洋圏が「大中華経済圏」や「華南経済圏」を形成し，独り気を吐いているからである。そして，中国経済成長の背景には積極的に対中投資を続ける香港・マカオ・台湾等の資本や東南アジアの華僑・華人資本の存在がある。このような華僑・華人パワーのパフォーマンスを捉えて，「華人経済圏」とか「華僑

・華人経済ネットワーク」といった用語が，20世紀末の国際経済のキイワードとして語られ始めた。例えば，香港の長江実業のリー・カシン（李嘉誠）氏やインドネシアのスノド・サリム（林紹良）氏，タイのチン・ソーポンパニット（陳弼臣）氏，マレーシアのロバート・クオク（郭鶴年）氏，フィリピンのエンリケ・ソベル氏，台湾の王永慶氏等の大資本家について大々的に取り扱われるようになった[1)]。

日本のマスコミや華僑・華人研究者が議論する華僑・華人，あるいはそのネットワークは大財閥のパフォーマンスのみであり，ミクロ世界での僑郷における華僑・華人の具体的活動やその役割に関する分析が全くない。そこで描かれているのは精々のところ，華僑・華人は「祖国」中国の発展を願い，大きく育った木の葉が再び根元に帰る「落葉帰根」のごとく，全世界に広がる華僑・華人もそのネットワークを利用して，「祖国」中国に積極的に経済投資をしているという構図である。

このような議論では，華僑・華人のミクロ・レベルの具体的な活動やそのネットワークを窺い知ることができない。華僑・華人が故郷で公益事業や経済援助を行う姿や，親族や同族ネットワークを通じて投資活動を行う姿は全く浮かんでこない。華僑・華人が「故郷に錦を飾る」とは一体どういうものか，彼らの故郷での郷村建設事業や経済援助がどういったものであるのか。華僑・華人の対中投資は，常に「華僑・華人ネットワーク」を前提にしているが，そのネットワークとはどのように機能しているのか。これらの点については全く不明である。これまでの議論は，華僑・華人の「中国人」としての「愛国・愛郷」にいささかの疑いも差し挟むことなく，21世紀は「中国人の世紀」だと中国を持ち上げる。「大中華主義」を賞賛する研究者の意図が一体どこにあるのか。

1）代表的な研究として，游仲勲編『世界のチャイニーズ—膨張する華僑・華人の経済力』（サイマル出版会，1991年）と同『華僑は中国をどう変えるか』（ＰＨＰ研究所，1993年），渡辺利夫編『華人経済の世紀—躍進中国の主役たち—』（プレジデント社，1994年），同『華人経済ネットワーク—中国に向かうアジア・アジアに向かう中国—』（実業之日本社，1994年）を参照されたい。

筆者は，1987年より僑郷（華僑の故郷）として有名な福建省晋江市龍湖鎮で農村調査を開始し，施氏と粘氏の同族組織とその歴史的変容を研究してきた[2)]。農村調査に入る度に在外華僑・華人の里帰りに遭遇し，彼らの公益事業や経済援助を大々的に讃える華美で盛大な行事を見学してきた。このような中で，過去四十数年間の中国共産党強権体制の下で死滅したと考えられてきた伝統社会が再び息を吹き返すのを目の当たりにし，また困難な時期をも含めて華僑・華人が故郷に送金や経済援助の手を差し延べ，彼らの族的絆を維持してきたことに驚きを覚えた。と同時に，これらの華僑・華人のパフォーマンスを研究もしてきた。

そこで，本研究はこれまでの閩南（福建省南部）僑郷における施氏同族組織研究の一環として，これらの地域史との関連で，華僑・華人の公益事業投資と郷村建設について，さらに華僑・華人の存在意義について考察するものである。

Ⅱ．晋江市の華僑・華人

1.　晋江農民の外国移民

晋江市は海に面し，耕地少なくして人口が多く，農業生産力は低い。農村労

2）これまでに以下の論考を発表しているので，参照されたい。「僑郷における郷鎮企業の展開とその問題点—「晋江モデル」の実態—」（関西大学『経済論集』第37巻第4号，1987年11月），「中国における同族組織の展開とその実態—福建省晋江県の施氏同族と地縁組織の関係—」（共著，『アジア研究』第36巻第4号），「中国における同族組織の分節形成と祖庁について—福建省晋江県施氏同族の調査事例—」（共著，『アジア研究』第36巻第4号，1989年12月），「台湾への移民・開発・定住と同族組織の形成—福建省晋江県満族粘氏の台湾移住とその族的結合—」（関西大学『経済論集』第41巻第6号，1992年3月），「移民社会台湾の同族結合と宗親会の形成—台湾華人社会研究序説—」（関西大学『経済論集』第42巻第1号，1992年5月），「中国的同族組織與農業集団化」（共著，香港・珠海文史研究所学会主編『羅香林教授紀念論文集（上）』1992年12月），「福建省晋江県満族粘氏の台湾移住とその族的結合」（『中央研究院台湾史田野研究室論文集(1)』1992年12月），「僑郷における同族ネットワーク—施氏一族の分節化と社会主義基層組織と経済建設—」（関西大学『経済論集』第43巻第2号，1993年6月）「福建における同族結合とその分化—施氏一族の移住と分節化—」（関西大学『経済論集』第44巻第3号，1994年8月）

働力は39.21万人で，農村人口の41.2%を占める。農牧漁業従事者は21.06万人で，農村労働力の53.7%を占める。にもかかわらず，農業労働力当たりの平均耕地面積は僅か2.3畝（約15.3アール）に過ぎず，農村家内工業が発展していなかった時期にあって，余剰労働力の捌け口は外国に求めなければならなかった[3]。晋江市龍湖鎮は深滬湾に深く抱かれ，耕地の多くは旱地で，その80%に地瓜（甘薯・紅薯）を栽培し，残りに落花生・大豆・水稲を栽培してきた。解放前において農民の主食は地瓜で，米を食べることは少なかった。農民の多くは半農半漁と小商売で生計を立ててきたが，一旦，戦乱や飢饉が発生すると，生計が困難となり，海を渡って外国へ出稼ぎに行った。それが本地区の華僑・華人の存在となった。

晋江市の移民史は，以下のようである[4]。晋江と台湾鹿港との直線距離は130海里で，早朝にモーター船で晋江を出発すれば，夕方には台湾に到着する距離である。これまでの台湾移民には3回のブームがあった。第1回目は，明末清初に大飢饉が発生した時であり，福建省南安県出身の鄭芝龍（鄭成功の父）が数万の沿海農漁民を台湾へ連れて行き，開墾に従事させた，第2回目は，鄭成功がオランダを駆逐して台湾を収復した時であり，約20万人が鄭成功について台湾へ渡った。第3回目は，1683年に福建水帥提督の施琅（潯江派16世）が2万余の水軍を率いて台湾の鄭氏政権を駆逐した時で，この時に施琅に従って多くの晋江県人が渡台し，開墾に従事した。

清朝は台湾を版図内に入れた当初，「遷海令」を敷いて，沿海諸省の農民に沿海より30里以内の居住と渡台を禁止した。しかし，乾隆初年より本地区から渡台する農民の数は増加し，彼らは台湾での開墾に従事した。1784年に清朝は晋江県蚶江と台湾鹿港との間の往来を認め，蚶江は台湾との主要貿易港となり，ここから台湾へ移民する者が増加した。その結果，晋江県は台湾人の故郷

3）童万亭主編『福建農業資源与区画（県級巻）』（福建科学技術出版社，1990）p. 458。
4）晋江県情調査組『晋江巻』（中国国情叢書—百県市経済社会調査，中国大百科全書出版社，1992年）pp. 379～380。

の一つとまで言われるようになった。1988年の統計で，祖籍を晋江に持つ台湾人は130余万人に達したと言われている[5)]。

1842年のアヘン戦争の結果，中国は広東（広州）・厦門・福州・寧波・上海の5港を開港させられ，晋江から台湾への移民は減少し，移民の主流は南洋へと変化した。特に，アヘン戦争後の社会治安の悪化や経済的困窮は，本地域の農民を大量に「華工」として南洋に送り出し，「苦力」として欧米列強植民地のプランテーションで働かせた。1847年～1853年3月までの間に厦門から出国した「華工」は1万2,151人といわれており，19世紀末～20世紀初に毎年4～5万人が移民し，その中には多くの晋江県人がいた。民国以後，東南アジア各国は「華工」の入国を制限したが，中国人は各種の方法で密入国をし，このような状況は解放直前まで続いた[6)]。

1845年の香港開港は，香港への移住者を徐々に増加させ，1930年頃には香港の晋江県人は1,000人を数えるまでに増加した。1938年に日本軍が厦門を占領したので，晋江県人は香港へ逃げ，その結果，香港の晋江県人は5,000人～1万にまで増加した[7)]。

1949年の中華人民共和国成立により香港・マカオへの流民が急増し，1950年代にも引き続き増加し，1957年と1958年，1962年，1976年，1980年には香港・マカオへの移民が最多となった[8)]。1980年には晋江移民は約30万人に達し，香港全人口の約6％を占めるまでになった[9)]。ある資料によれば，1953年～1986年までに晋江県からの出国者は9万3,573人であり，そのうち香港・マカオへ

5）同上書，p. 17。

6）同上書，p. 22。

7）同上書，pp. 377～378。1957年は反右派闘争，1958年は大躍進期で共産風が吹いた時期で，1962年は大躍進の失敗による最も困難な時期，1976年は文革の終了期で，経済的政治的困難から脱出するために香港・マカオへ逃げたものと考えられる。

8）同上書，p. 22。1980年は改革・開放政策が実施され，親族を頼って国外へ脱出することが容易となり，増加したと考えられる。

9）同上書，p. 377。

の移民は6万2,641人（66.8%）で，解放後の香港・マカオ移民としては最多である[10]。農民の応答によれば，1978年前に龍湖郷前港村からの出国者は1万人を超え，そのうち香港への出稼ぎが最多である。例えば，香港の前港村出身者は1,000人を数える。早期に香港へ出稼ぎに行った者は船務公司に雇われ，船着場で人夫として働いた。最近の出稼ぎは建設労働者に多い。村民が香港で働くようになったきっかけは親戚や友人の紹介によるもので，まず地元の公安局へ行き，海外関係の存在を申請し，許可を得て香港へ出た。

1988年の不完全統計によれば，祖籍を泉州市に持つ華僑・華裔は600余万人である[11]。1987年の晋江県僑情普査（センサス）によれば，晋江に祖籍を持つ華僑・華人は94万4,500人で，香港・マカオ在住（台湾を除く）が29万8,500人，計124.3万人の在外郷親がいる。その内訳は，フィリピンに65万人，香港・マカオに29.85万人，インドネシアに9.5万人，マレーシアに7.5万人，シンガポールに4.5万人，ビルマに1万3,000人，ベトナムに1万人，タイに5,000人，アメリカに2,000人，カナダに2,000人，日本に1,000人，オーストラリアに1,000人，その他に5万5,500人となっている。一般にフィリピン華僑・華人の90%は福建省出身であり，そのうちの50%までが晋江県出身であるといわれている。龍湖・永寧・石獅・金井・深滬・英林等の郷鎮にはフィリピン，東石・安海両鎮はシンガポールとマレーシア，安海鎮霊水と磁灶鎮にはインドネシア華僑・華人が多い。晋江県の中では龍湖・金井・石獅の3郷鎮は代表的な僑郷である[12]。華僑・華人は故郷へ送金したり，外貨を持ち帰ったりしており，推計によると晋江に里帰りする華僑・華人は延べ約5万人で，1人当たり

10）「泉州：外商開発区進入実質開発段階」（『泉州晩報』1992年2月19日），荘晏成・他編『泉州巻』（中國沿海城市投資環境綜覧，華東師範大学出版社，1991年）によれば，泉州出身の華僑・華人は500万人とあり，福建省出身の華僑・華人の半分を占めている。また，香港・マカオ在住の泉州籍人は69万人である（p. 4）。

11）前掲『晋江巻』p. 378。童万亭主編，前掲書によれば，晋江県の華僑・華人と香港・マカオ同胞は110万人で，全国でも著名な僑郷である。p. 458。

12）前掲『晋江巻』p. 382。晋江帰国華僑聯合会編『晋江僑郷』（亜州晋江社団聯合会成立一周年・晋江県帰国華僑聯合会成立四十周年紀念特刊，1992年10月）p. 23。

5,000香港ドルを持ち帰ったとすれば，年間約2.5億香港ドルとなる。また，1988年に台湾資本の晋江への独資と合資による工場設立は18件で，総投資額は6,833万元であった[13]。台湾人が里帰りする回数は多くなり，その結果，投資も多くなり，中台経済関係は一層緊密化しつつある[14]。

2. 地域開発に対する華僑・華人の貢献

華僑・華人の故郷への送金や公益事業投資は解放前だけでなく[15]，共産党が政権を打ち立てた1949年以後も継続した。1950年〜1986年までの晋江県への華僑送金を見たのが，第1表である。第1表を見ると，政治運動が華僑・華人を排斥した文革中も送金は続けられており，送金額も減少していない。1992年全市が募金した学資金は3,700万元に達し，それは1991年に比較して16.7％増加した。そのうち華僑・華人の投資が2,539万元（68.6％）で，企業と一般大衆の寄付が1,160余万元であった。その結果，92年末より各種の教育基金会が200組織され，基金総額は3,060万元となった[16]。

華僑・華人の故郷への貢献は送金や公益事業への投資だけではなく，地域経済の活性化がある。閩南は既述したごとく華僑・華人の故郷であり，華僑・華人の企業投資も多い。これまで泉州市(泉州市区の鯉城区と晋江市・石獅市・恵安県・安溪県・永春県・徳化県を含む。台湾が支配する金門県は含めない）が受け入れた台湾企業は330社に及び，投資契約額は16億元，台湾企業投資は2億7,200万ドルに達し，晋江市・石獅市・鯉城区の各郷鎮や街区で台湾企業が投資していないところはない。1992年に泉州市へ里帰りした台湾人は6万余人であった[17]。

13）拙著『共同幻想としての≪中華≫―経済学者論述海峡両岸的形勢』（田畑書店，1993年）の第5章「台湾資本の中国進出と両岸経済関係の進展」を参照されたい。

14）華僑・華人の故郷への公益事業投資や経済援助については，福建省档案館編『福建華僑档案史料（上）（下）』（档案出版社，1990年）に詳しいので，参照されたい。

15）「泉州／台湾関係日雛密接」（『福建日報』1993年3月21日）。

16）「我市一年教育投資近億元」『晋江僑訊』第102期，1993年8月30日。

17）「5大外資商業項目立項建設」（『泉州晩報』1993年2月19日）。

第1表　1950年～1986年晋江県への華僑送金の推移　（単位：万元）

年度	金　額	年度	金　額	年度	金　額
1950	2,925	1962	2,146	1974	3,145
1951	4,306	1963	2,528	1975	3,315
1952	4,399	1964	3,122	1976	3,736
1953	4,114	1965	3,315	1977	4,049
1954	4,018	1966	2,981	1978	3,902
1955	3,517	1967	2,594	1979	3,776
1956	3,263	1968	2,310	1980	2,479
1957	3,204	1969	2,876	1981	1,570
1958	2,510	1970	2,146	1982	2,132
1959	1,774	1971	2,582	1983	1,752
1960	2,186	1972	2,477	1984	805
1961	1,746	1973	2,631	1985	340
				1986	429

出所）晋江県情調査組『晋江巻』（中国国情叢書一百県市経済社会調査，中国大百科全書出版社，1992年）p. 381.

1993年1月末の統計では，泉州市が批准した外資企業は2,519社，総投資額は139億9,836万元で，外国からの観光客は延べ25万人であった[18]。

晋江市の統計によれば[19]，1992年6月までの外資投資項目は300件に及び，総投資額は契約ベースで31.6億元である。晋江市への投資の特徴は，①1項目の平均投資額が1,054万元とその規模が大きく，1,000万元以上の投資は55件で

18）「晋江県経済建設前面発展」（『福建僑報』1993年3月21）。

19）「晋江三個月吸引外資三十億」（『晋江郷訊』第91期，1992年6月30日）。石獅市を中心とした晋南一帯は民間主導による経済開発モデル地区で，経済特区の厦門等と比較して1件当たりの投資額は少なく，ましてや高技術の産業は多くない。主たる産業は服装や靴等の製造業で，仕事の内容が労働集約的加工業であるため，閩北（福建省北部）や江西省・湖南省・四川省・安徽省等からの若い出稼ぎ労働者（民工）を雇用して，急速に発展している。石獅市（1987年12月に晋江県石獅鎮と蚶江鎮・永寧鎮・祥芝郷が合併して省轄県級市に昇格した）の経済成長を見ると，本地区は農民達の金儲けに対する積極的姿勢とは裏腹に，道路や電気・自来水（水道）・電話等のインフラが未整備で，治安や交通が非常に乱れている。呉徳厚『石獅巻』（中國沿海城市投資環境綜覧，華東師範大学出版社，1989年）を参照。

ある。②投資項目が多種目にわたり，その中にはハイテク部門や第三次産業がかなりの比重を占めている。③独資（100%外資）の割合が182項目と多く，投資額の83.5%を占めている。1992年6月末に晋江市が批准した「三資」企業（独資・合資・合弁）は110社であり，総投資額が6.1億元で，そのうち外資は5.3億元である。1992年に晋江市の外向型経済は飛躍的に発展し，外資企業投資は385社，1件当たり平均投資額905万元で，投資額1,000万ドル以上は12件である。これまでの外資企業投資は903社で，そのうち10余社の生産額は5,000元以上である。例えば，「利瑶績造有限公司」の生産額は1億元を超え，1,800万ドルの外貨を獲得した[20]。1993年度の批准した第三次産業の「三資企業」は，48項目，総投資額約6億ドル，そのうち外資が2億7,700万ドルで，すでに15項目が開業している[21]。

晋江市には，外資受入れ機関として晋江市対外経済貿易委員会外商投資企業協会があり，積極的に外資を受け入れている。その受皿として近年，泉州市一帯に，①馬甲良畜試験区，②蕭厝開発区，③萬安軽工業開発区，④泉州市三資企業小区，⑤石獅工業総合開発区，⑥福埔総合開発区（面積1,600畝），⑦安平工業総合開発区，⑧蟠龍工業開発区の8開発区が制定され，積極的に民間資本（外資）を導入し，地域経済開発を試みている。このうち6開発区は外資開発区として，この1年余の間に6,000余万元を投資して，15万m^2の工場や商店・住宅等の建設を行ってきた[22]。晋江には⑥福埔総合開発区と⑦安平工業総合開発区，その他に東海按開発区がある。

華僑・華人の公益事業と営利事業投資により，1991年の晋江県都市住民の平均年収は2,216元，農民の平均年収は1,214元となり[23]，全国平均1,544元，708.6元に比較すると，かなり水準が高い[24]。晋江県は全国「百強県」に数え

20）前掲「泉州：外商開発区進入実質開発段階」。
21）「我市第三産業発展迅速」『晋江僑訊』第107期，1994年3月30日。
22）晋江市龍湖僑聯編『龍湖僑郷』（1992年8月31日）p. 5。
23）晋江帰国華僑聯合会編，前掲『晋江僑郷』p. 68，p. 58。
24）国家統計局編『中国統計年鑑1992』（統計出版社，1992年）p. 275。

られ，第55位に列する[25]。

3. 晋江県帰国華僑聯合会の歴史と役割

晋江県帰国華僑聯合会（以下，晋江県僑聯）は，1951年4月に107名の代表が参加して青陽鎮希信小学校で晋江県第1期帰国華僑僑眷代表会議が開かれ成立した。この会議では「晋江県華僑愛国公約」と「晋江県帰国華僑聯誼会」を制定し，第1期執行委員会の主席に蔡世的，副主席に荘金木，常務委員を7名，執行委員19名，候補執行委員6名を選出した[26]。1955年に第2期，1959年第3期，1962年第4期，1979年第5期，1984年第6期，1988年第7期，1993年8期の代表大会を開催し，これまで8期の委員会を経ている。各期の主席や副主席，秘書長，常務委員，委員の構成を示すと，第2表のごとくである。

第2表　晋江県僑聯歴代委員会の構成

役職名	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期
主　席	蔡世的	陳啓紫	陳啓紫	陳啓紫	高作楫	何揚明	何揚明 陳都榜	陳都榜
副主席	荘金木	荘金木 他2人	蔡尤淘 他2人	荘秋心 他3人	何揚明 他5人	陳立察 他7人	陳都榜 他6人	許永恵 他6人
秘書長 秘　書	荘進来	陳立察	陳立察	高作楫 陳立察	陳立察	なし	許永恵	許永恵 （兼）
常務委員	荘金木 他6人	王烏参 他13人	王烏参 他14人	荘秋心 他18人	王珍圜 他26人	王為謙 他49人	王為謙 他59人	盧温勝 他59人
執行委員	萬朝南 他18人	王志華 他40人	王秀全 他36人	荘之楓 他48人	王吉林 他65人	王為謙 他98人	丁文禮 他129人	62人
候補執行委員	王寶玉 他5人							

出所）晋江帰国華僑聯合会編『晋江僑郷』1992年，pp. 14～16.「晋江第八届僑聯常務委員会名単」『晋江僑訊』第103期，1993年11月30日。第6期から名誉主席と顧問が設けられ，第6期の名誉主席4人，顧問4人で，第7期の名誉主席5人，顧問が11人，第8期名誉主席は11人である。

25）晋江帰国華僑聯合会編，前掲『晋江僑郷』p. 58。

26）同上書，pp. 12～13，鄔炳山「晋江県首届華僑代表会議和僑聯会成立的情況」（『晋江文史資料選輯』第9輯，1988年8月），p. 60。

成立当初の晋江県僑聯は青陽街の店舗の2階にあった。その頃は土地改革運動と「抗美援朝運動」（朝鮮戦争においてアメリカと戦い，北朝鮮を援助する）の時期で，義勇軍に「晋江華僑號」という戦闘機を寄贈したりしている。1954年には業務を拡大して，僑眷の家屋を半分借りて事務所を移し，ここにミシン縫製工場を設立して80余名の華僑家族の就業と生活の道を開いた。1955年の第2期委員会において資金を募り，400m^{2}の平屋の僑聯公所を建設した。1957年1月には名称を「晋江県帰国華僑聯誼会」から「晋江県帰国華僑聯合会」に変更し，個人会員制から団体会員制へ改めた。県党委員会組織部は省僑務委員会の下達により県僑聯に7名を出向させてきた。

1959年の第3期委員会において14万元の寄附金を得て，僑聯公所前に3階建ての僑聯大厦を建立した。1960年代初期の自然災害による困難な時期に，県と郷の僑聯は広範に華僑・華人に訴え，化学肥料や食糧・食用油を輸入し，僑眷の生産や生活の改善を援助した。同時に，投資を促し，経済建設を支援した。多くの帰国華僑や僑眷の就業や子女の入学の困難を解決するために，東石・青陽・深滬・金井・安海等にミシン縫製工場や刺繍工場，華僑補習学校を設立した。また，外国における排華運動のため，多くの華僑が帰国したので，県属の雙陽華僑農場と連携して，帰国華僑をその農場に入れ，彼らの就業と生活の問題を解決した。

文革中，僑務政策は踏みにじられ，僑聯組織は撤収され，建物等の財産は占拠された。「四人組」粉砕後の1979年に第5期帰国華僑代表大会が開催され，僑聯も復活し，建物等の財産も返還された。僑聯復活後，混乱した社会を元に戻すことが先決となり，「海外関係」で捏造された冤罪案件151件を無罪にし，歴史的事件1,124件を再審査して処理し，華僑の住宅6万m^{2}近くを返却させ，1960年代に「簡政」（行革）のため下放された帰国華僑および華僑，帰国華僑の直系親族ほぼ300人を元の職場・地位に戻した。

改革・開放政策により，在外華僑・華人が「探親」と観光，祖先訪問，投資相談に訪れるようになったため，これまでの僑聯大厦では手狭となり，新しい

僑聯大厦を建設することになった。1985年に青陽新大街に120万元を費やして，敷地8畝（53.5アール），4階建ての客室64室，156ベッドの僑聯大厦が建設された。建設費の80余万元は華僑・華人の寄付である。1985年8月に県僑聯は新しいオフィスに入居し，元のオフィスは県農業銀行に転用された。不完全統計によれば，1980年から県僑聯が受け入れた在外郷親の訪問団は760余団，延べ2万余人で，1991年末までに300余の三資企業を導入し，華僑資本や華僑パワーを利用して1.6万の郷鎮企業を発展させた。華僑・華人の寄附金による公益事業額は3億元に達した。

また，晋江県僑聯は1959年1月から1960年5月まで機関誌『晋江僑訊』を19号まで発行し，文革中に停刊となるが，1982年6月に復刊して後，1994年6月30日現在までに110号を数えている[27]。晋江県僑聯の下には現在，青陽鎮僑聯（1959年成立），金井鎮僑聯（1951年），安海鎮僑聯（1951年），東石鎮僑聯（1950年），陳埭鎮僑聯（1960年），磁灶鎮僑聯（1956年），龍湖鎮僑聯（1956年），深滬鎮僑聯（1961年），永和鎮僑聯（1961年），羅山鎮僑聯（1959年），紫帽鎮僑聯（1981年），英林鎮僑聯（1964年），池店鎮僑聯（1960年）といった12の郷鎮レベルに僑聯が成立している[28]。

4.　晋江県帰国華僑聯合会歴代主席のプロフィール

ここでは，県僑聯歴代委員会主席の個人史から，晋江県における華僑・華人，あるいは僑眷の活動と果たしたその役割を考察する[29]。

①　第1期主席（1951年4月27日～1955年5月26日）蔡世的

1925年9月20日に石獅大侖村に生まれ，11歳の時にフィリピンへ渡る。ここで初めて就学し，後に叔父の商売を手伝う。1948年に帰国し，新中国成立後，積極的に故郷の土地改革運動に参加し，郷村建設運動に携わる。1951年4月に晋江県第1期帰国華僑僑眷代表会議を招集する。この会議において「晋江県帰

27）28）晋江帰国華僑聯合会編，前掲『晋江僑郷』p. 21，pp. 18～20。
29）同上書，pp. 16～17。

国華僑聯誼会」が成立し，県僑聯執行委員会主席に選出される。1955年に晋江地区華僑代表として省第1期人民代表大会に出席する。1957年に香港へ行き，そこに定住し，1966年3月5日香港で病死した。

② 第2期主席（1955年5月27日～1959年1月17日）・第3期主席（1959年1月18日～1962年1月25日）・第4期主席（1962年1月26日～1979年6月30日）陳啓紫

1902年に晋江県新門外曽林村（現・泉州市）で生まれる。14歳の時，叔父に着いてインドネシア泗水に渡り，コーヒーと砂糖の卸売りを生業とし，後にその地で非常に活躍する商人となる。抗日戦争勃発後，泗水華僑の「捐助祖国慈善委員会」の委員を担任し，積極的に宣伝と募金活動に参加し，祖国の抗日戦争を支持した。1953年に家族を連れて帰国し，福建省華僑投資公司常務董事に就き，泉州と晋江一帯で帰国華僑・僑眷を動員して，泉州僑光影劇院と石獅華僑劇院を設立した。1954年に晋江県僑聯主席になり，1955年には晋江県副県長に就任した。この前後に県政協常務委員，省政協常務委員，全国僑聯常務委員などの重職に就いた[30]。1955年と1957年の県僑聯で活躍中，県僑聯の海外華僑へのサービスをさらに良くするために，前後2回にわたり華僑・僑眷を動員して県僑聯ビルを建設するという貢献をした。1972年2月に72歳で病死した。

③ 第5期主席（1979年7月1日～1984年6月17日）高作楫

1906年に安海に生まれ，15歳でフィリピンへ行き，生計の道を謀る。抗日戦争期間，「菲律賓怡朗華僑救亡會」を組織し，その会の主席となる。1955年帰国後，安海鎮僑聯主席，晋江県僑聯副主席・主席・名誉主席，県政協常務委員・副主席，省僑聯委員，省政協委員を歴任した。在外華僑を動員して故郷に資金を供出させ，慈善・文教・衛生等の各種公益事業を興し，僑郷大衆の物質的文化的生活の改善のために貢献した。1988年2月25日に安海で病逝した。享年83歳であった。

30）1954年はまだ第1期委員会の期間中であり，その時に第2期委員会主席になっているのは不思議である。1954年は1955年の間違いと思われる。

④　第6期主席(1984年6月18日～1988年～12月17日)・第7期主席（1988年12月18日～1990年11月14日）何揚明

1911年10月，金井鎮福全村に生まれ，青年時代にフィリピンへ求学に行き，生計を謀る。中華総工会と「怡朗(Iloilo) 救亡会」等の進歩的組織に参加し，当地の抗日活動を支持した。抗戦勝利後，厦門へ行って商売をし，1949年に晋江に戻り，前後して金井僑聯，石獅華僑劇院，石獅僑聯と石獅中国旅行社に在職する。1978年に県僑聯へ配属となり副主席を担当する。1980年代初め，晋江県副県長，県僑聯主席に当選する。石獅僑聯に在職中，発起して石獅僑聯会事務所を建設し，石獅華僑新村を建設準備，石獅僑聯服務社（石獅中国旅行社の前身）を創設した。県僑聯に在職中，積極的に海外華僑と香港・マカオ同胞を動員し，帰郷させて「四つの現代化」建設に参加させ，各種の公益事業を興し，『晋江僑訊』を復刊させ，県僑聯新大厦の建設に貢献した。全国僑聯委員，省人民代表大会代表，省僑聯常務委員，市僑聯副主席，市政協常務委員および県政協常務委員，県致公党顧問等の職に就き，省僑界人士を代表して北京での国慶節観禮に参加して，周恩来総理等の国家指導者の接見を受けた。また，全国僑聯工作積極分子と省僑聯工作積極分子等の称号を獲得したこともある。1990年11月14日に故郷で病逝した。享年79歳であった。

⑤　第7期主席(1991年4月24日～1993年9月22日，残存期間)・第8期主席（1993年9月22日～）陳都榜[31]

1936年に石獅祥芝鎮祥芝村に生まれ，幼年時代は故郷で就学し，1953年に郷政工作に参加した。党支部書記，人民公社党委員会副書記等に就いた。1984年12月に全県第7期帰国華僑僑眷代表大会において県僑聯常務副主席に当選した。1991年4月に県僑聯第7期第6回常務委員会会議において主席に選出された。当面，県僑務辦公室副主任，県政協常務委員，県政協三胞委（香港・マカオ

31）「我市召開第八次僑代会」『晋江僑訊』第103期，1993年11月30日。

・台湾）主任，泉州市僑聯副主席，福建省僑聯常務委員，中華全国僑聯委員等の要職に就いている。県落実僑務政策辦公室で仕事をしていた間に，僑務工作者と一緒に積極的に関連部門に働きかけて，文革中の帰国華僑・僑眷のいわゆる「海外関係」に起因した冤罪事件を糾正し，古い事件を再調査して処理し，華僑所有家屋を返却し，1960年代初期の「精簡下放」(行革による職の喪失と農村への下放)に遭った帰国華僑や僑眷，帰国華僑の直系親族を元のあるいは新しい職場に復帰させた。

Ⅲ．華僑・華人の公益事業と営利事業

1．龍湖鎮の華僑華人と龍湖鎮帰国華僑聯合会

晋江市龍湖鎮は全国でも有名な僑郷の一つであり，在外華僑・華人の多い鎮である。本鎮の面積は62.73km^2，人口は約8万300人，42行政村に82の自然村がある。外国や香港・マカオ・台湾に住む華僑・華人は12万5千人，フィリピンに最も多く，その他インドネシア・シンガポール・マレーシア等の42カ国に住んでいる。全鎮の僑眷（華僑の国内にいる家族）は約6万4,000人で，全鎮人口の80%を占める。

本地方は土地が少なく痩せており，人口が多い。生活は困難で，戦乱や天災のため飢饉がおこり，疫病が流行って多くの生命が失われた。そのため，歴史的に出国する者が後を絶たず，特にアヘン戦争後は多くなった[32]。

華僑は労働者として，本国での農業収益減収により，東南アジアでの鉱山開発や商業経営のために移民した。華僑は財を成した後，出生揺藍の地を忘れず，自身の経歴の教訓から教育を最も重視するのが一般的傾向である。例えば，フィリピン華僑の施性水と施家羅らは解放前に資金を集めて南僑中学を創設し，晋南の多数の学生のために就学の機会を与え，少なからずの人材を養成した。小学校経営のために，各村僑に気前よく金を出して学校運営経費を提供

32）前掲『晋江巻』p. 17。

し，困難を解決した。ある華僑の家庭では三世代にわたって故郷に橋を建設するといった公益事業もあった。

1956年に僑郷の維持発展と僑務政策の宣伝のために，華僑帰国聯合会（僑聯）が設立された。僑聯は現在で5期目となり，僑務政策において業績を上げ，1988年～1990年に連続して県や省の僑聯先進単位に選ばれた。僑務政策を完全に行い，鎮内の36戸の僑戸の階級成分を変更させ，土地改革で没収された家屋179軒，蔬菜市場2カ所，油坊1軒を取り戻した。1960年代の行政機構簡素化により仕事を奪われた華僑子女に対し，その仕事を取り戻したりもした[33]。

このような僑務政策の遂行により，路線転換後の1979年から1991年までの間に，華僑・華人は帰国団を組織して，観光や里帰りをした。その数は130団体，延べ4,248人，個人で帰国・里帰りした者は毎年延べ3,000人に達した。僑聯のオフィスも借家から自弁へと，規模も大きくなり，これまでに4回引っ越しをした。1991年11月11日に200万元を投資して建設した2,000m^{2}の龍湖僑聯大厦はオフィスだけではなく，華僑・華人が帰国した時のためのホテルやレストランが備わっている[34]。

龍湖郷僑聯の各期の役職者を表にしたのが，第3表である。これを見ると，理事長を初めとする役員に施姓の多いことが分かる。

2.　龍湖鎮での公益事業

本地域では1971年に文革が一段落した。以後，施氏一族ではフィリピン施氏一族との交流を再開し，1970年代から寺廟等の修復を始めた。戦後すぐに台湾施氏とフィリピン施氏との交流は始まるが，台湾施氏が中国の施氏と交流を始めるのは遅く，1987年11月に台湾当局が中国への「探親」（里帰り）を許可して以降である。台湾施氏の中には「探親」許可以前に中国を訪問したため，台湾政府から処分を受ける者も出たが，1988年に入ると交流は一気に進展した。

33）前掲『龍湖僑郷』p. 7。

34）『晋江僑訊』第84期，1991年12月30日。

第3表　龍湖郷僑聯歴代委員会の構成

役員名	第1期 56～61年	第2期 62～75年	第3期 78～85年	第4期 85～91年	第5期 91年10月～
主　席	施甘甘	施甘甘	呉身河	呉長利	劉天台
副主席	施百箴 他2人	洪源箴 施百堂	施教葛 他2人	施教葛 他2人	許清源 他5人 (施姓2人)
秘　書	王志雄 施家煌	施家隍	郭華天	施教評	施金榜
常務委員			許万寿 他20人 (施姓10人)	施金榜 他21人 (施姓9人)	施教評 他16人 (施姓7人)
委　員	施麗玉 他27人 (施姓11人)	施麗玉 他29人 (施姓10人)	王秀心 他42人 (施姓22人)	呉海参 他34人 (施姓17人)	施文灿 他31人 (施姓16人)

出所）前掲『龍湖僑聯』pp. 23～26.
第4期には名誉主席4人（うち施姓3人）が設けられた。

1955年～1990年に香港・マカオ・台湾の公益事業に対する寄付は6,107万元で，その主なものは小・中学校建設費，教育基金の設置，奨学金の設置，学校経常費，橋や道路の修築，発電所の建設，電線の架設と街灯の敷設，水利の修理，集会所の建設，祠堂・寺廟の修築である。その中でも特に教育関係が突出しており，全鎮に小学校42カ所を新設した。これらの中で前港・石厦・石亀・龍園の小学校の規模は非常に壮観である。また，中専農業工程学校や南僑中学・陽渓中学の建築も壮麗である。特に，衙口村にある南僑中学のキャンパスは合理的で，環境も非常によい[35]。

1970年代後半から華僑・華人は再び故郷に錦を飾るようになり，公益事業や経済援助を積極的に再開した。例えば，龍湖鎮前港村の尊道小学校は在外華僑・華人からの寄付1,500万元で，旧小学校を現在の場所に移転した。僑眷の家

35）華僑・華人の教育投資については，菲華前港同郷会『尊道学校創立八十周年紀念1909-1989』(1989年)，『晋江南僑中学特刊1946-1986』(1986年)，厚澤小学校慶籌備委員会『福建省晋江県厚澤小学校二十周年暨教育学楼落成慶典専輯』(1992年）が編纂されている。

では，1986年に在外華僑・華人と連絡がつき，「海外関係」によりその後の生活は徐々に上向き，生活にゆとりが出るようになった。

龍湖鎮では，在外華僑・華人は1992年の1年間に家族や親族への寄付だけでなく，郷村建設に対しても大きく貢献してきた。例えば，教育や水利・電力・道路・環境衛生・文化体育等の公益事業に対して2,067万6,710元を投資しており，これは晋江市が受け入れた寄付総額の3分の1に相当する[36]。第4表を見ると，龍湖郷への公益事業投資は他の郷鎮に比して抜きん出ている。また，第4表からは華僑・華人の公益事業投資の中で，教育投資に重点が置かれていることが窺える。

解放後の1950年から1991年までの，在外華僑・華人による龍湖鎮での公益事業と経済援助は以下の通りである[37]。

(1)　教育基金・学校経費・校舎建設・教師学生への奨学金2,804.7万元

(2)　1979年〜1991年間の帰国団体・延4,248人，個人帰国は延べ3,000人，公益事業寄付金 7,115.2万元

(3)　発電所建設 443万元

(4)　水利建設 72万元

(5)　橋・道路の修築 1,821.1万元

(6)　祠堂・寺廟建設，老人会施設建設 2,091.3万元

3.　龍湖鎮での営利事業

華僑・華人の営利事業投資を見ると，本地域には三つの「閑」があることから，華僑・華人の合弁による家内工業の縫製工場の設立が数多く見受けられる。「三閑」とは，①歴史的に在外華僑・華人から毎年3,000〜4,000万元に達する送金があり，これが余剰資金（閑散資金）として有効利用されている。②外国在住華僑は1949年の革命により華僑地主（南洋地主）と規定され，土地を没収

36）「龍湖鎮“三胞”去年捐資逾両千万」（『福建日報』1993年3月24日）。

37）前掲『龍湖僑郷』pp. 9〜19。

第4表　1949年～1987年晋江県への華僑公益事業投資　（単位：万元）

項目 / 金額 / 郷鎮	教育				病院および文化衛生			その他公益事業											
	中学	小学	幼稚園	教育基金	病院数	金額	文化衛生	農田水利	橋・道路建設 村数	橋・道路建設 金額	電気照明敷設 村数	電気照明敷設 金額	水道	自動車（輌）	テレビ（台）	テープレコーダー（台）	その他（件）	僑聯	その他
青陽鎮	18.10	148	8.80	13	2	1		20	4	34	11	42	16.7		1	1			165
陳埭鎮		42.50	9	21	1	2		157	14	69	13	79		16	14	19	23	10	180
池店郷	45.19	307.84		43	1	1.5	19	19.5	12	147	13	30		2	9	11	25		175
磁灶鎮	21.27	88.86		14	2	12.7	12	25	3	17	4	21		7	6	8	20		180
内坑郷	32.00	100		14				10.8	4	19	7	22			8	4	6		175
安海鎮	59.84	191.18	34	24	4	49	2.5	22.4	12	37	27	41			11	12	35		180
東石鎮	11.42	208.95		33	2	2.1	21	17	8	32	20	91		6	1	1			90
永和郷	12.41	327.88	10	11	10	5.4	13	12.6	15	4	21	111		8	12	12	15	30	170
英林郷	33.30	9.91		13	5	15.8		20	8	42	9	28		10	11	3	10	33	140
金井鎮	191.65	600	35	30				96	6	394	18	73		7	10	8	20	12	185
深滬鎮	22.10	263.18	3	30	1	17.1		51	17	78	9	73	49	7	9		15	25	145
永寧鎮		332.55	9.5	24	2	4.6		20	7	45	16	95		6	2	3	10		145
蚶江郷	0.40	118.61		13	2	1		25	3	23	9	21		7	4	6	15		105
祥芝郷	37.57	226.66		16	1	0.7		40	6	30	19	86	9	4	11	9	20		155
石獅鎮	141	657.29	34	62	5	12.9	3.9	77	9	320	20	241	17	68	54	33	59	78	230
龍湖郷	107.81	933.96	16	93			110	84	27	299	78	277		17	27	25	141		225
羅山郷		394.87		11	2	14.5	12.4	20	3	62	62	17		7					95
紫帽山		14		3				12	5	11	4	7		1	1	2	8		55
合計	948.06	5,437.84	113.80	468	40	140	199.8	613	163	1,663	304	1,416	81.7	177	191	157	422	188	2,795

出所）前掲『晋江巻』p. 383.　晋江市地方志編纂委員会編『晋江市志』（下巻），（上海三聯書店，1994年）p. 1214.

された。文革後に返却されたが，華僑・華人は里帰りをせず，彼らの住宅が空家（閑房）となっている。③農村の余剰労働力（閑散労働力）が存在する。この「三閑」を有効利用して聯戸集資工業を興し，地域経済発展に結び付けた。すなわち，「三閑」を「三宝」に転化した。その結果，農村内に数多くの家内工業が見受けられるようになった。多くの農家では“South China”ブランドのミシンを数十台を取り付け，省外から出稼ぎに来た若い男女を大量に雇用して縫製作業をさせ，物資の集散地である「華南のミニ香港」石獅で製品を販売する。その結果，ある農家では御殿のような家を建築するまでに農家経済が豊かになった[38]。

特に，龍湖鎮から車で15～20分の距離にある石獅工業総合開発区では，急速な開発が行われ，周辺農村で製造された衣服や靴の集散地として，珠江デルタ農村の変化に勝るとも劣らない賑わいを見せている。石獅には全国各地からバイヤーが押し寄せ，周辺村落で製造された衣服類が中国全土に運ばれて行く。本地域の経済発展は物資集散地としての石獅を抜きにしては語れない。

ところで，福建省への投資は台湾資本が最大であることは大方の知るところである。厦門の湖里経済特区と海滄経済特区への投資は台湾資本が最大であり，厦門は「小台北」とまで言われるほどである。しかしながら，台湾資本の本地域への投資はまだ少ない。石獅の経済繁栄に比して，龍湖鎮への台湾資本をはじめとした外資は少ない。龍湖鎮への「三資」企業の投資は53件で，年間総生産額は6,000万元，外貨獲得は4,000万元と，それほど多くはない[39]。その理由は何よりもインフラの未整備にある。その中でも特に交通が不便なことである。たとえ本地域出身の華僑・華人が多かったとしても，投資条件が未整備であり，本地域への投資は経済活動にとってマイナス面が多いため，まだ少ない。投資者は，「故郷に錦を飾る」ことが最大の目的ではない。故郷の経済発展を念頭においたとしても，経済メリットがなければ営利事業投資を行いはし

38）前掲『晋江巻』p. 31。
39）前掲『龍湖僑郷』p. 7。

第5表　1988年度郷鎮企業総生産額1,000万元超過専業村　（単位：万元）

村　名	所在郷鎮	製　品	総生産額	村　名	所在郷鎮	製　品	総生産額
磁　灶	磁灶鎮	陶　瓷	1,822	高　霞	青陽鎮	副食品	1,028
嶺　畔	磁灶鎮	陶　瓷	1,353	象　山	青陽鎮	缶　詰	1,012
下官路	磁灶鎮	陶　瓷	1,766	梅　山	青陽鎮	自動車部品	1,016.42
下　灶	磁灶鎮	陶　瓷	1,342	蓮　嶼	青陽鎮	自動車部品	1,017.21
銭　坡	磁灶鎮	陶　瓷	1,229	鈇　塘	羅山郷	缶　詰	1,834.80
大　埔	磁灶鎮	陶　瓷	1,102	沙　塘	羅山郷	錫　箔	1,031
岸　兜	陳埭鎮	靴	1,075.43	湖　内	内坑郷	スリッパ	1,523.23
四　境	陳埭鎮	靴	1,016	高　湖	英林郷	羽　毛	1,537
花庁口	陳埭鎮	プラスチック	1,602.96	水　頭	蚶江鎮	プレス部品	1,070
双　溝	陳埭鎮	自動車部品	1,076.68	祥　漁	祥芝郷	漁　業	1,070
横　坂	陳埭鎮	靴	1,021	新湖工業区	石獅鎮	総　合	1,884
涵　埭	陳埭鎮	靴	1,001	新湖居委会	石獅鎮	総　合	3,991.33
洋　埭	陳埭鎮	靴	3,511.16				

出所）前掲『晋江市志（上巻）』pp. 309～310より作成。

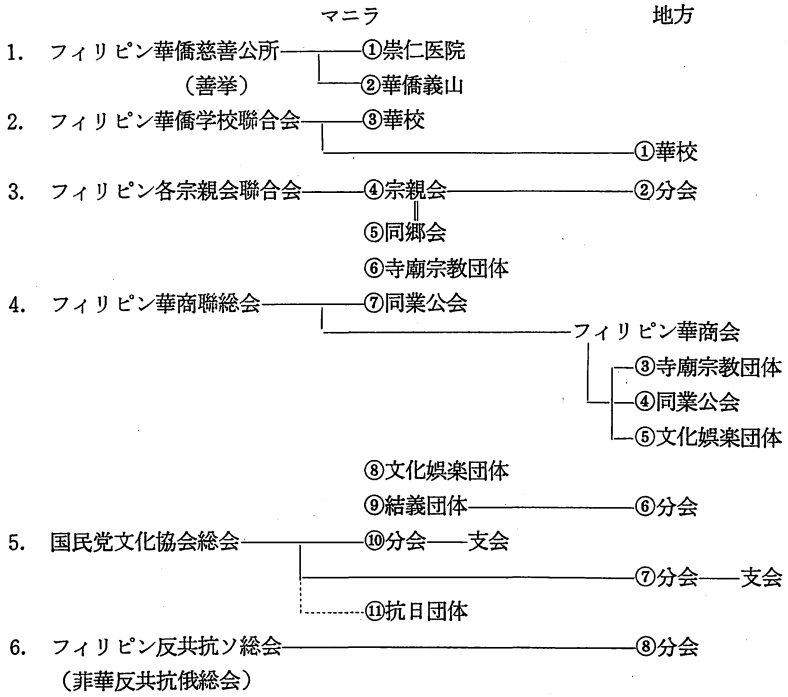
ない。

第5表の1988年度郷鎮企業総生産額一千万元超過専業村一覧を見ると，陶瓷業で有名な磁灶鎮，「三資企業」の製靴業の多い陳埭鎮，県庁所在地の青陽鎮等の村々であり，晋南の龍湖郷の村は一カ村も存在しない。それゆえ，自営業を経営する者を除いて，本地域の青壮年の多くは遠く深圳・厦門や近くでは石獅へ出掛けて商売をする者が多い。一方，本地域での危険できつい石工や建築工の仕事は他省から出稼ぎに来た「外工」が従事しているのが実情である。

Ⅳ．華僑・華人の郷村建設

1.　龍湖鎮各僑村の建設状況

龍湖鎮出身の華僑・華人は出先地で，同族組織や同郷組織をつくり，互いに協力し合ってきた。本鎮出身の華僑・華人は既述したようにフィリピンに多く，第1図に見られるような各種の社会組織を形成し，自己の権益を保護してきた。筆者がこれまで調査研究してきた施氏一族は，出身地の社会構造・社会関係をそのまま移民先にまで持ち込み，第6表のような各種の同郷組織を形成



出所）施振民「菲律濱華人文化持續」『中央研究院民族学研究集刊』第42期，1977年4月，p. 172.

第1図　フィリピン華人社会の組織構造

し，相互扶助を行ってきた。

ところで，第6表を見ると，施氏一族には全体を取りまとめる「旅菲臨濮堂」があり，その下に銭江派の銭江聯合会と潯江派の潯江公会とがある。さらにその下には出身村毎に同郷会が組織されており，同族組織の分節は同郷組織と一体化している。というのは，同郷会という名称を名乗っていても，出身者の大部分は同姓（施姓）であり，異なるのは彼らの配偶者の姓である。また，同郷組織（同族組織の分節）が小学校や中学校の校董会（学校理事会）を組織して教育投資を行っている。すなわち，出身地の集団原理をそのまま移民先に持ち込んで集団を形成しているのである。

第6表　フィリピン・マニラの晋江出身主要宗親総会一覧表

組織名称	成立年代	姓氏	類別
旅菲西河林氏宗親総会	1908年	林	単姓
旅菲有嬀堂総堂	1908年	陳	単姓
旅菲讓徳呉氏宗親総会	1909年	呉	単姓
旅菲臨濮堂	1911年	施	単姓
旅菲弘農楊氏宗親総会	1915年	楊	単姓
旅菲太原王氏宗親総会	1922年	王	単姓
旅菲錦綉庄氏宗親総会	1929年	庄	単姓
旅菲江夏黄氏宗親総会	1930年	黄	単姓
旅菲隴西李氏宗親総会	1933年	李	単姓
菲律賓許氏宗親総会	1936年	許	単姓
菲律賓蘇氏宗親総会	1937年	蘇	単姓
旅菲汾陽郭氏宗親総会	1938年	郭	単姓
旅菲滎陽鄭氏宗親総会	1940年	鄭	単姓
旅菲潘氏宗親総会	1955年	潘	単姓
旅菲深滬川陳氏宗親総会	1958年	陳	単姓
菲律賓楽安孫氏宗親総会	1968年	孫	単姓
旅菲曽丘宗親総会	1906年	曽・丘・邱	聯宗
菲律賓済陽柯蔡宗親総会	1909年	柯・蔡	聯宗
菲律賓河源張顔同宗総会	1924年	張・顔	聯宗
旅菲六桂堂宗親総会	1930年	洪・翁・方・江・龔・汪	聯宗
菲律賓劉杜宗親総会	1932年	劉・侯・留・杜	聯宗
旅菲嬀汭五姓聯宗総会	1935年	胡・虞・田・陳・姚	聯宗
旅菲列山五姓聯宗総会	1936年	呂・盧・高・許・紀	聯宗
旅菲版築傅頼同宗総会	1939年	傅・頼	聯宗
旅菲宋戴宗親総会	1940年	宋・戴	聯宗
旅菲堇楊宗親総会	1950年	堇・楊	聯宗
旅菲靖真五姓聯宗総会	1950年	金・丁・馬・白・郭	聯宗
旅菲六蘭堂宗親総会	1953年	蕭・章・葉・林・尤・沈	聯宗
菲律賓咸陽五姓聯宗総会	1966年	魏・馮・梁・華・万	聯宗
菲律賓朱倪宗親総会	1980年	朱・倪	聯宗

出所）前掲『晋江華僑志』pp. 75～76. 前掲『晋江市志（下巻）』p. 1203.

これらの同郷会は解放前から解放後も一貫して故郷で公益事業投資を行ってきたが，1978年12月の中国共産党第11期三中全会での「改革・開放」路線への転換以降，積極的に故郷に帰り各村で郷村建設のために投資を行っている。晋

第7表 龍湖郷各僑村の海外人口分布

	①在籍	②フィリピン	③香港	④マカオ	⑤台湾	⑥シンガポール	⑦インドネシア	⑧その他	⑨華僑・華人	⑩ %	⑪華僑眷属
衙口村（南潯村を含む）	9,500余	3,500余			3,500余				7,000余	73.7	
前港村	2,500	2,000余			数千人				2,000余	80	
埔頭村	1,200余	200余							200余	16.7	
魯東村	1,018（235戸）								40戸	17	
楓林村	489	②＋③＋④＋⑤280							280	57.3	
大埔村	1,400余	②＋⑤300余							約1,200	85.7	
陽溪村	1,240									80.4	
錫坑村	1,620								1,860	114	
后溪村	1,150								1,189	103	
呉厝村	1,988								455	28	
后宅村	1,620	123	97	7		26		アメリカ8	261	16.1	
埭頭村	953	534	476	43	724	12	4		1,793	188	
湖北村	3,411								1,600	48	
坑尾村	854								800余	94	
杆柄村	1,555								1,290	83	
石亀村	3,589									80以上	
浯坑村	2,156（385戸）								2,000余（236戸）	61.3	
蘇坑村	786	②＋③＋④634							634	80.7	
新街村	1,636								483	30	
埔錦村	1,270	②＋⑥＋⑦＋⑧（アメリカ＋カナダ）900余，③＋④＋⑤200余								86.6	

秀山村	3,051	②+③+④+⑤2,245								74	
内坑村	1,050								270	16.67	
檀林村	2,700余	約5,000							約5,000	185	
石厦村	4,025										
洪溪村	1,514	600余 （大ルソン100余を含まず）	400余	100余	5				1,205	75	
西梧村	1,153	約1,500	約400	58						65	25%
鈔厝村	1,663	367	336	14						43	
古湖村	977	80	180	30	24					32	
坑邊村	2 800								3,500	125	
龍埔村	884	45	263	2	4	9		ビルマ 7, 日本 1	331	39.2	
陳店村	1,185	89	114	30	5	48				24	105
曽厝村	914								735	80.4	
崙上村	3,000余								1,000余	3分の1	
龍玉村	3,100 （570戸）								230戸	40.3	
龍園村	1,860	1,018	715	144	12	101	62	オーストラリア 8	2,060	110.8	830
溪后村	1,210	②+③+④ 421							421	34.8	
溪前村	710	②+③ 135							135	19.0	
后坑村	1,620	123	97	7		26	7	アメリカ8	268	16.5	
焼灰村	3,413									58.6	2,100
瑶厝村	1,726									25	
南庄村	1,627	②+③+④ 1,028			75					67.8	

出所）晋江市龍湖僑聯編『龍湖僑郷―綜合報導専輯』（1992年８月）と龍湖僑聯大厦５階にある「龍湖郷華僑展覧室」の展示資料より作成。

江市龍湖僑聯編『龍湖僑郷』から龍湖郷42カ村のうち施姓の同族村だけ18カ村を選び，僑村の具体的実情を考察してみよう[40]。

(1)　衙口村・南潯村

衙口村・南潯村は7自然村で構成される行政村で，解放前は衙口鎮を形成していた。総人口は9,500余人の大村で，香港・マカオ・台湾や外国に居住する者は3,500余人に達する。1963年～1978年の公益事業への寄付は人民元で350万元，1978年～1991年春の寄付金は教育経費319万元，水力発電照明経費89万元，その他の公益事業経費230万元の計638万元に達した。そのうち，施維鵬が281万5,127元，施連登が151万9,600元を寄付した。これらの公益事業には衙口村にある南僑中学の資金を含めていない。

(2)　前　港　村

前港村の人口は2,550人で，そのうちの80%が僑眷（在外華僑の家族）である。香港・マカオや外国に居住する者は2,000人で，数千人が台湾へ移住している。彼らの公益事業への寄付は450余万元に達する。

1984年に「菲華晋江前港同郷会」は尊道小学校に新校舎を寄付した。新校舎は二階建ての24教室と1,000人を収容できる講堂があり，20余畝（15畝が1ヘクタール）の運動場等がある。続いて，分村の前港新郷（村）に尊道分校を建設し，これにより省政府より表彰された。尊道小学校創立80周年には在外郷親が教育基金150万元を寄付した。全国僑聯主席の荘炎林が記念式典において「僑胞が資金を拠出して教育を行う精神は感服の到りである」と述べ，国家教育委員会主任も視察に来て，「重教興学，功在未来」という題詞を贈った。「菲華晋江前港同郷会」尊道名誉理事長の施家約は学校を建て教育に貢献したので，省・市

40）「龍湖僑郷』では，僑村（華僑の村）として41カ村と学校3校が紹介されている。ここでは，施姓が多く住む18カ村と現在の郷政府所在地の中山街を構成する陽渓村を取り上げ，華僑・華人の故郷に対する援助の実態を考察する。

・県から「楽育英才」という契牌を授与され，また施家約の提唱により，銭江橋の建設，電気を引いて照明を付け，火力発電所を建設し，セメント舗装路を敷き，祠堂を修築し，芝居舞台を建設し，真如聖蹟（玄天上帝を祀る村廟の真如殿）を修理し，前港と前港新郷（村）の老人会所を新築し，村の様相を一変させた。1992年には43万元を費やして教師用宿舎を建設し，1993年３月その完成記念式典を行った。そこで，前港村民委員会と尊道校董会，尊道学校聯合は「関心家郷公益事業的楷模」（故郷の公益事業に関心を抱く模範）の扁額を送り，その功績を表彰した。

(3) 埔　頭　村

埔頭村の人口は1,200余人で，フィリピン華僑・僑眷は200余人，香港・マカオ華僑・僑眷は80余人，台湾は1,000余人，シンガポール華僑は数十人である。これら在外華僑・華人は，この数年来，数十万元の寄付をし，故郷の公益事業を建設し，故郷の振興のために私心のない貢献をしている。

84年にフィリピン華僑が８万元を寄付し，全村及び洋林・蒲蓉の３村に高圧電線を架設し，照明やその他の用電を解決した。フィリピン華僑の施棋楠・議鉤・議井・文廣・教坤・学踏・振欽・西塡・國蝶，蕭光輅等が30万元の寄付をして埔頭小学校８棟を建設し，その学校の周囲は450メートルに及び，計人民元35万元を費やした。台湾の施振欽は一人で５万元を寄付して芝居舞台を建設した。旅非埔頭同郷会は２万余元を寄付して２km の埔頭大路を修築した。施棋楠・議鉤兄弟は５万余元を寄付して埔頭村内に350メートルの道を建設した。フィリピンの蕭光輅は一人で12万元を寄付して蕭厝宗祠を建築した。

特に，在外僑胞は教育事業に対して熱心で，多くの人が資金を集めて教育基金に４万余元を寄付した。台湾の施□川女士は香港ドル５万ドル，マカオの施淑嫌氏は香港ドル１万ドルを教育基金に寄付し，現在，埔頭小学校の教育基金は約10万元となった。

(4) 魯　東　村

魯東村の戸数は235戸，人口は1,018人で，耕地面積は647畝の小村で，僑眷は40戸で全体の17%である。

1978年以後，各村は積極的に華僑や香港・マカオ・台湾の同族が故郷に帰り，工場や合資企業等の各種の企業を興し，まるで雨後の筍のように彷彿と発展し，これに従って村民の収入が増加し，生活が向上した。公益事業も徐々に増加し，新しい様相を呈した。本村では在外華僑はあまり多くなく，仕事は肉体労働ばかりで，かつてはかなり貧困村であった。数年来，華僑は学校の創設・経営，学校経常費用と設備の負担，全村に照明用電線の架設，有線放送の設置，芝居舞台の建設，バスケットコートの舗装，村の環状道路の舗修，防御林の植林等々に大きな貢献をした。その費用は20数万元に達し，本村の様相を一変させた。

(5) 大　埔　村

大埔村の人口は1,400余人で，在外僑胞はフィリピンが最も多く，その他にアメリカ・カナダ・オーストラリア・シンガポール等であり，それらの僑眷は約1,200人である。香港・台湾にはその家族も含めて300余人がいる。

解放後，フィリピン僑胞の施坤・施能岩・王則咤・戴源懐・施養抱・施養瑞・王愛城・王愛源・施純賛等が大埔旅菲同郷会を組織し，香港在住の戴亜獅・何永棍・施純遠・王清徹・施其仁・何永実・王清渓等が大埔旅港集青小学校友会を創設した。両会は故郷の公益事業に熱心で，教育事業を絶やすことなく送金で建設を援助した。1950年～1970年に外匯人民元2万7,000余元，1971年～1980年に外匯人民元5万8,500元，1981年～1991年に外匯人民元39万9,500余元を公益事業に投入し，郷村の様相を一変させ，村民の生活を高めた。

(6) 陽　渓　村

本行政村は古盈村と中山街で構成されている。全村戸数は340戸，人口は

1,240人，華僑の親族は総人口の80.4%を占める。1970年代以降の寄付金は60万2,000元である。その内訳は以下の通りである。電灯の架設5万3,000元，環状村道3万8,000元，水利施設と救災2万元，戯台（芝居舞台）建設と各種福利事業14万9,000元。

このうち在香港郷親の呉天賜は各項目の建設に5万元を寄付した。在フィリピン郷親の呉文品は環状村道建設および福利事業を積極的に提唱・着手し，8回にわたり帰郷して企画・督促・意見のまとめ等，数多くの仕事をこなした。古盈村はさしあたって村の景観が改変し，1990年に文明村に選ばれた。

古盈旅菲同済社理事長の呉良元は歴代理事長の奉仕精神を受け継ぎ，古盈村建設にさらに上層建築を築いた。旅菲南呉八郷の人々は校董事を組織して陽渓小学校の資金を集め，学校を管理する。駐郷幹事部によれば，数年来40余万を投資し，大いに学習環境を改善して，さらに教学の質を高め，これまで省・市・県により先進単位に選ばれた。

(7) 后　宅　村

后宅村は厚澤村ともいう。村の人口は700余人で，フィリピン・カナダ・アメリカ・香港・マカオ・台湾の各地に300余人がいる。

この間，在外華僑・華人は学校教育の創設・経営，発電所の創設・運営，農田水利，植樹造林，敬老，文物古跡の維持，故郷の環境美化等々の公益事業に80余万元を寄付した。

本村の愛国華僑の施教敏は富豪ではないけれども，独力で厚澤小学校舎を創設し，施教姜は学校の塀を建設した。愛国華僑の施教項は独力で前港村および尊道小学校へ通じるセメント道路に20万元を寄付し，建設した。1987年に旅厚澤郷親会理事長の施議鎰は独力で2.5万元を寄付して，老人会所を建築し，活動広場をセメント舗装した。

(8) 湖　北　村

湖北村は全省最大の淡水湖である龍湖畔に位置し，立地上，交通の便がよい。人口は3,411人で，外国や香港・マカオ・台湾に1,600人の郷親がおり，それは全人口の48%を占める。近年，僑胞は数百万元を寄付して潯聯・英山・潯峰の3カ所の小学校を創設し，芝居舞台四つ，2カ所の幼稚園の遊戯場を建造した。全村5自然村に240キロワットの送電線 15km の架設，15.2m² の敷石道路の舗装，祖庁・宗祠・廟宇12座を建設した。西畲（潯）の施氏茂諒宗祠（恭徳堂）は華僑・華人の50万元の寄付により修築された。

(9) 坑　尾　村

坑尾村は龍湖の湖畔に位置する美しい僑郷である。人口は854人で，フィリピン・香港・マカオ・台湾に800余人がいる。

本村の在外郷親は総計80余万元を寄付し，英美小学校校舎の建築，学校経費の負担，施氏祠堂の修築，照明用電線の架設，水利の建設と補修，道路の舗装，公共施設の建設等を行った。

(10) 杆　柄　村

杆柄村の人口は1,555人で，フィリピン・香港・マカオ・台湾に1,290人がいる。この数年来，海外僑親は故郷の公益事業に対して熱心であり，80万元を送金して学校を建設し，教育基金を設け，発電所を建設し，全村に水力発電による送電線を架設し，橋や道路を修築した。当面，環状セメント村道3,500メートルと，村民委員会・老人会所，照明付きバスケットコートの建設を三大項目とし，130余万元の資金を本村出身の僑親より募集している。

(11) 蘇　坑　村

全村人口は786人で，フィリピン・香港・マカオに634人がおり，それは全人口の80%を占めている。

1984年～1991年にフィリピン・香港の華僑は23万2,000余香港ドルと7万3,200余元を寄付し，蘇坑小学校の経常費，学校設備の購入，全村に照明用電線の敷設，幼稚園の創立，学校環境の整備，電話の設置，老人会所の建設，堤防と道路の修築，施氏家廟や寺廟の修建を行った。

(12) 新　街　村

新街行政村は新街と炉灶の両村で構成される。全村人口は1,636人で，「三胞」人口は483人，そのうち新街に181人，炉灶に302人がいる。近年来「三胞」が熱心に公益事業，特に教育事業を重視し，以下のごとく献金を行っている。

新街に新美小学校を建設するために5万元を，炉灶の炉灶小学校に3万元を投資し，新美小学校に4万元，炉灶小学校に4.1万元を教育基金として募金した。個人で学校建設や教育基金の募金のために積極的に寄付した者は，新街出身のフィリピン華僑の呉天賜，香港の許景泰・呉文種・許文碧，炉灶出身のフィリピン華僑施天送・施□法氏などである。また，送電のために新街へ3万5,000元，炉灶に3,000元の寄付があった。

(13) 石　厦　村

石厦村は8自然村で構成され，戸数は855戸，人口は4,025人で，僑戸は半数以上を占める。数年来，華僑は故郷に資金を寄付して，以下のような公益事業を行ってきた。

1987年には教育基金に80万元，建徳石路の舗装に4万元，愛隣石路の舗装に2万元。

1990年には剛毅路の舗装に21万元，草宅石路の舗装に2万元，東頭石厝の舗装に3万元，中份セメント路の舗装に10万元，劉厝セメントの舗装に10万元，中份芝居舞台の建設に5万元，変電所の建設に10万元。

1991年には石厦大道の舗装に64万元，恵済橋の建設に46万元，厝后セメント路の舗装と芝居舞台の建設に5万元，劉厝芝居舞台の建設に3万元。

この他に，外資を導入して二つの大型工場を建設し，140万元を投資した。これらの投資総計は325万元に達する。

(14) 洪　溪　村

龍湖鎮洪溪村は，在村人口1,514人，在外華僑等は1,205人，そのうちフィリピン600余人，ルソン島100余人，香港400余人，マカオ100余人，台湾5人で，在外人口は全村人口の75%である。

在外華僑等は祖国を愛し，故郷の公益事業に関心を示し，1957年より故郷の教育振興のため校舎を新築拡張した。洪溪村の中学校・小学校と幼稚園の運営経費を支え，設備や教材を増設した。児童に園費や学費免除のために，48.9万元の教育投資をした。

故郷建設のため，道路建設や架橋，環状村道の舗装，水力・火力発電所の建設，農業のために水利の修築，祠堂や寺廟の再建，芝居舞台の建設のために238万元を投資した。

20年来，在外愛国人士達は故郷の公益事業と教育事業のために合計286.9万元を寄付した。

(15) 鈔　厝　村

総戸数は315戸，人口は1,663人である。フィリピン華僑は65戸367人で総人口の15.5%，香港華僑は61戸，336人で14.1%，マカオ華僑は4戸で14人の0.6%を占める。

1979年～1991年に在外華僑は熱心に教育経費の寄付を集め，それは22万元に達した。村中の照明改善のために，フィリピン華僑の施議均・施学烈は4万6,000元の寄付を集め，電線架設用諸設備を購入した。長年，寺廟は修理できないまま放置されていたが，フィリピン華僑の施教柱は単独で6万4,000余元を寄付し，芝居舞台を建設した。交通の利便，村営企業の発展のため，フィリピン華僑の施議徳・施教炒・施柱教らは23万元の資金を寄付し，劉厝へ通じるセメン

ト路を建造した。僑親からの総計90万元の寄付により公益事業に投資した。

(16) 龍　埔　村

龍埔村の人口は884人で，香港・マカオ・台湾，その他の国に331人がおり，全村人口の39.2%を占める。具体的にはフィリピンに45人，シンガポールに9人，ビルマに7人，日本に1人，香港に263人，マカオに2人，台湾に4人である。これら華僑は「祖国」に関心を抱き，故郷の公益事業に投資した。

1987年よりフィリピンの施純昌・施成家の二人は，香港・台湾・マカオの同胞と協力して54万元を寄付し，それで照明用電線の架線，校舎建設，学校設備の設置し，学校経費に当てた。

(17) 陳　店　村

全村の戸数は132戸，人口は1,185人で，フィリピンに14戸・89人，シンガポールに6戸・48人，香港に22戸・114人，マカオに8戸・30人，台湾に5人おり，三胞（香港・マカオ・台湾）の家族は105人である。

1980年〜1991年にフィリピン・香港・シンガポール・マカオの僑胞は熱心に公益事業へ42万元もの投資を行い，亭店小学校を建設し，祠堂を修復し，コンクリートのバスケットコートや芝居舞台を建設し，電気照明を設置し，発電機設備を設置した。

施性鵬・施徳銘・施天賜・施子淵・施能鏗・施港・施純芳等のフィリピン僑胞は陳店教育基金理事会を組織して，1988年より教育経費を3年間に合計3万1,000元を寄付した。玉科幼児園の永久教育基金として15万フィリピン・ペソがあり，フィリピンの施徳銘氏がセメント舗装の環状村道（現在建設中）に12万元を送金した。

(18) 龍　園　村

全村戸数は604戸，人口は1,860人である。この他，フィリピンに116戸・

1,018人，シンガポールに11戸・101人，インドに7戸・62人，オーストラリアに2戸・8人，香港に96戸・715人，マカオに31戸・104人，台湾に5戸・12人がおり，これらの家族は国内に213戸・830人がいる。

1983年〜1991年に在外郷親が故郷の教育等の公益事業に約161.5万元を寄付した。その内訳は，新校舎建設投資に131.5万元，水力発電所と蓄電建設に16万元，道路舗装・学校周辺と芝居舞台建設に4万元，小学校と幼稚園経費・奨学金に10万元といった内容である。

2.　龍湖鎮出身の有力華僑・華人の公益事業投資

以上，龍湖鎮18カ村の実情を具体的に見てきたが，龍湖鎮の42カ村の在外人口分布を整理したのが第7表である。第7表から明らかなように本地域からの移民はフィリピンを最多とし，香港・マカオ・台湾と続く。しかも，既述したごとく，フィリピン移民の歴史は新しく，移民一世の親族が中国にまだ生存している。

改革・開放後，一世の華僑・華人は積極的に里帰り初め，故郷に各種の寄付をしてきた。これら各村の寄付をまとめたのが第8表である。1970年代後半から華僑・華人は自己の出身村に対して積極的に公益事業投資を行っていることが明らかとなる。投資の内容は教育関係が最も多く，彼らが幼少時貧困のため教育を十分に受ける機会がなく，教育こそが社会を豊かにしてくれると考えてのことである。その他に道路舗装や橋梁建設，発電所や変電所建設，電線や街灯の敷設，寺廟や祠堂の修築，老人会施設などの建設と，華僑・華人の援助がなければ，本地域の経済水準は低いと考えられる。それゆえに，外国への出稼ぎ移民の歴史があり，もし移民できなければ国内各地へ出稼ぎに行かなければならなかった。

次に，公益事業に投資をする華僑・華人とはどのような人達であろうか。彼らの多くは幼い時，両親や兄弟に連れられて外国に渡り，苦労して財を成してきた者が多く，現在，彼らの多くは中小企業の経営者である。『龍湖僑郷』には，

龍湖鎮出身の有力華僑・華人として５人の愛国先賢と，僑郷に30万元以上を寄付した僑親57人が紹介されている。まず５人の愛国先賢の経歴を見てみよう[41]。

(1) 僑郷愛国先賢

① 許　友　超（1900年～1963年）

晋江県檀林村人。かつてマニラ市中華商会主席を担当。1932年蔡廷楷と「芝沙丹尼」に乗り，香港から厦門へ行き，途中華僑を動員して福建政治の支持を表明した。蔡将軍は「為国義務」の４字を題して，その愛国熱情を表彰した。その後，厦門市長・龍汀省長に就任し，地方政治に貢献した。

② 呉　趙　順（1889年～1939年）

晋江古盈村人。故郷の公益事業に熱心で，特に教育を重視し，資金を集めて陽渓小学校を創建し，第１期董事長となった。学校経費を提供する以外に，車１台を送り，小学生の送迎に利用させた。解放後，その家族は遺言を守り，故郷の教育を援助した。1984年に中山街の資産，順記楼と店舗１間，住宅19間を陽渓校董会に無償で寄付した。

③ 施　性　水（1897年～1963年）[42]

晋江県華峯郷人。日本軍の南進によりフィリピンが陥落し抗日運動に参加する。勝利後，華僑の境遇が危急であったため，身を艇して抗争・交渉し，華僑の利益を保護し，大いに褒め讃えられた。フィリピンに崇仁病院・華僑中学の創建，中華商会ビルの再建，また旅菲臨濮堂建設の準備，故郷の教育に対して強い関心を持ち，前港村の施家羅等と資金を募り南僑中学を創建した。そして，善挙公会董事長・華僑教育会会長・中華商会理事長などの要職に就いた。

41）『龍湖僑郷』では，僑郷愛国先賢として５人の僑親を，僑郷に30万元以上寄付をした僑親として57人を紹介している。ここでは，簡単に僑郷愛国先賢５人の経歴だけを紹介する。

42）呉泰主編『晋江華僑志』（上海人民出版社，1994年）p. 186。

第8表　龍湖郷各僑村の華僑僑・華人の公益事業投資　（単位：万元）

	①学所経費	②校舎建設	③学校設備	④教育基金	⑤道路舗装橋梁建設	⑥発電変電所電線敷設	⑦廟・祠堂の修築	⑧老人会等施設建設	⑨その他	⑩公益事業合計
衙口村（南潯村を含む）	319						89		230	638(78-91年) 3
前港村	32	77.62	15.41	111.7	54	11.89	5.46	13		326.08
埔頭村		35		10	7	5	12		5	
魯東村	×	×	×		×	×			×	20数万
楓林村										9.4626(10名)
大埔村				48.5						
陽溪村	40余				3.8	5.3			水利施設　2 福祉事業　14.9	60.2
錫坑村	×	×	×		×	×	×	×	×	123.39(80-91年)
后溪村	×	×			×	×	×	×		100.44(75-91年)
呉厝村	×	×	×		×	×	×	×		100
后宅村	×	×			×	×		2.5		80余
埭頭村					×					
湖北村	×				×	×	50			数百
坑尾村	×	×			×	×	×	×		80余
杆柄村		×		×	×	×				80余
石亀村	①+②+③68.2				⑤+⑥24.8		⑦+⑧+⑨115.2 大宗祠修復に100			296.2
浯坑村	①+② 12			2	10余	8			100 （香港ドル）	100余
蘇坑村	×	×	×			×	×			香港ドル23.2余 7.32(84-91年)
新街村	8			8.1		3.8				
埔錦村	20.5	8.2			42	6.5	13.0	4.2	0.7	
秀山村	×	×	×		×	×			×	72(80年以降)
内坑村	①+② 30				3.8	9.2	22.4	8.7	8	80.8(81-91年)

檀林村	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
石厦村					161	10			8	325(90-91年)
洪溪村	①+②+③+④ 48.9				⑤+⑥+⑦+⑧ 238					286.9(57年以降)
西梧村	×	×	×		×	×			×	32.23 フィリピン・ペソ14.75 香港ドル 20.57
鈔厝村	22				9.2	4.6	6.4余		村営企業 23	90
古湖村	①+②+③+④ 37.3				3.2	7.8				48.3
坑邊村	65	31			80	79				138.9
龍埔村	×	×	×			×				54(87年以降)
陳店村	3.1	×		15	12	×	×	×	×	42(80-91年)
曾厝村		×	×		×	×	×		×	17余(84-90年) フィリピン・ペソ 12余(84-90年
嵛上村	20	58		30	23.65	13.5	50		7.7	202.85(65年以降)
龍玉村		136		4	⑤+⑥+⑦ 114					250
龍園村	10	131.5			⑤+⑨ 4	16			×	161.5(83-91年)
溪后村		×				×				147(改革開放後)
溪前村					147					20余(改革開放後)
后坑村										
焼灰村	12.4				25				20.6	65(70年代以降)
瑶厝村				100					40	140
南庄村		35	③+④4.7		8	15	30	3.2	4	128.2

出所）前掲『龍湖僑郷一綜合報導専輯』と龍湖僑聯大厦５階にある「龍湖郷華僑展覧室」の展示資料より作成。
×は投資された項目を指している。
1978～91年の衙口村の寄付金のうち，施維鵬281万5,127元，施連登151万9,600元を含む。前港村の寄付金は1982年以降の合計である。
楓林村の寄付は呉文遠（8.2万元）ほか９名の寄付者である。大埔村の寄付は大埔旅菲同郷会と大埔旅港集青小学校友会の送金で，1950～70年2.7万元，71～80年5.85万元，81～91年39.95万元である。
后宅村の投資のうち，施教敏20万元，施議錦2.5万元。杵柄村は130余万元の寄付を集めて，環状村道の舗装，村民委員会と老人会所，照明付バスケット・コートを建設する予定。埔錦村は僑資55万元を導入して４本の環状村道を舗装する予定である。石厦村の合計には，外資の工業投資140万元を含む。洪溪村の道路建設はフィリピン華僑の施至成が180万元を寄付。溪前村の寄付は洪祖杭一人による。

第9表　30万元以上を寄付した龍湖鎮出身の有名華僑・華人（57名）

	出生年	年齢	出身村	移民先	移民時期	宗親会・同郷会の役職歴
洪祖杭	1948	45	溪前村	香港	1958年	
許自欽	1942	51	檀林村	フィリピン	現地出生	旅菲晋江檀林同郷会副理事長
施子清	1936		南庄村	香港	1956年	晋江香港同郷会会長，福建省政協委
施維雄	1914	死亡	衙口村	フィリピン	1937年	
施至成	—		洪溪村	フィリピン	幼年期	東南アジア商業大王，フィリピン五大金満家の一人
施文種	—		石厦村	フィリピン	現地出生	
施連登	1906	87	衙口村	フィリピン	14歳	衙口同郷会理事長，南僑中学名誉理事長
施教煥	1937	56	前港新村	香港	1964年	晋江香港同郷会副会長，香港官塘商会会長
呉玉樹	1906	87	錫坑村	フィリピン	年少時	
蔡錫鏞	1926	67	瑶厝村	フィリピン	終戦後	旅菲柯蔡同郷会副理事長
呉長瑜	—		西梧村	フィリピン	幼年期	
洪源章	1916	77	焼灰村	フィリピン	1935年	旅菲英林洪氏家淵総会理事長，僑美小学校董事長
許潭台	1923	70	龍玉村	フィリピン	現地出生	旅菲龍玉同郷会理事・理事長
洪我景	1949	44	杭邊村	香港→フィリピンへ	14歳	旅菲六桂堂宗親会執行監事長，英林洪氏宗親会執行理事長 旅菲英林同郷会理事
許龍宣	1908	85	龍玉村	フィリピン	15歳	旅菲龍玉同郷会董事長・名誉董事長、菲華聯誼会副董事長
呉修流	1926	67	埭頭村	フィリピン	1947年	旅菲讓徳堂呉氏宗親会常務理事，旅菲陽溪校董会董事長
施至向	1903	死亡	杆柄村	フィリピン	18歳	観峅同郷会名誉理事長
施教灿	1913?		石厦村	フィリピン	年少時	旅菲石厦同郷会理事
許秋水	1940	53	檀林村	香港→フィリピンへ	1957年	旅菲晋江檀林同郷会副理事長，旅菲石光中学校友会副理事長 檀声小校学教育基金会主任委員
許志傑	—		火灰埔村	フィリピン	20歳	
荘自奮	1921	72	英厝村	フィリピン	年少時	
施世築	1943	50	坑尾村	香港	1964年	旅港南僑校友会副理事長・理事長，旅港南僑校友会副会長 旅港施姓宗親会常務理事

許龍煉	1919	74	龍玉村	フィリピン		旅菲龍玉同郷会常務理事
許其昌	—		石亀許厝村	香港	母と一緒	香港維徳集団董事長，香港海外商業聯誼会理事，旅港晋江同郷会理事，旅港南平市同郷会名誉会長，南平市政和・松渓県教育基金会会長，南僑中学校友会副会長
施雨霜	—		衙口村	フィリピン	幼年時14歳帰国	南僑校友会総会名誉会長，旅菲衙口同郷会理事，旅菲杆柄同郷会理事長
施清漢	—		前港村	フィリピン	童年	旅菲晋江前港同郷会理事長，菲律濱臨濮堂77期・78期建設主任
施能忠	1928		龍園村	フィリピン	1940年	旅菲紹徳同郷会副理事長・理事長，潯江公会副理事長・理事長・臨濮堂副理事長・理事長
許澤天	1931	62	龍玉村	フィリピン		旅菲龍玉同郷会理事・副理事長
郭国鈀	78歳で死去		后溪村	フィリピン		
呉維新	1942		洋按村？	香港	1962年	
施性答	1925		前港村？	フィリピン	1938年	世界臨濮堂永久名誉理事長
施順昌	1920	73	龍園埔村	フィリピン	童年	
施建徳	1920	73	石厦村	フィリピン	年少時	旅菲石厦同郷会理事長，旅菲臨濮堂副理事長
施教項	1923	70	后宅村	フィリピン	年少時	
呉文遠	1922	71	楓林村	フィリピン	13歳	陽渓校董会監事
許自業	—		石亀許厝村	フィリピン	若い時	
許澤鑫	1938	55	龍玉村	フィリピン		旅菲龍玉同郷会理事・理事長
許維新	1943	50	龍玉村	フィリピン		旅菲龍玉同郷会理事長，旅菲南僑中学校友会理事
許書業	1923	70	石亀許厝村	フィリピン	幼児期に母と一緒	烈山五牲副理事長，旅菲石亀同郷会19期・20期理事長
施議程	1922	71	石厦村	フィリピン		旅菲銭江聯合会理事長，旅菲石厦同郷会理事長，銭江聯合会常務顧問
施性祥	1945	48	杆柄村	フィリピン	現地出生	杆柄董事長
洪祖粒	1926	67	崙上村	フィリピン	22歳	
洪天錫	1992年死去			香港	童年	

	出生年	年齢	出身地	移民先	移民時期	宗親会・同郷会の役職歴
施能灶	1929	64	杆柄村	フィリピン	1948年	旅菲観峿同郷会理事長
呉似錦	1933		呉厝村	フィリピン	現地出生	台湾中華航空公司顧問，呉氏宗親会（讓徳堂）・東呉同郷会等の重要職務
許経格	1905	87	石亀許厝村	フィリピン	19歳	旅菲石亀同郷会３期・４期理事長・永久理事長，旅菲許氏総会理事長・董事長，菲洪門進歩党党部常務顧問，烈山五牲聯合総会副理事長
許啓明			石亀許厝村	フィリピン	現地出生	旅菲石亀許厝同郷会理事長
洪由亦			焼灰村	香港	(子供の時母と一緒)	
許文正	1925	68	龍玉村	フィリピン		旅菲許氏宗親会会長，龍玉同郷会理事長
施教南	—		—	フィリピン	幼少	旅菲銭江聯合会理事長，旅菲石厦同郷会理事長
施教柱	1935	58	鈔厝村	フィリピン	童年	晋江市龍湖鎮僑聯会常務委，鈔厝村旅菲同郷会理事長
施成佳	1944	49	龍園埔村	フィリピン	童年	
許文頂	1920	63	龍玉村	フィリピン		旅菲龍玉同郷会責任者
呉振成	1923	60	錫坑村	フィリピン	７歳	旅菲錫里公益所顧問
施徳銘	1955	38	陳店村	香港	1973年	旅菲紹徳同郷会秘書長
呉振益	1943	50	錫坑村	フィリピン	13歳	旅菲錫里公益所顧問
施灿悦	1915		南庄村	フィリピン	1929年	中菲了解協会・菲華聯誼会・東風体育会会長，銭江聯合会理事長

出所）前掲『龍湖僑郷』より作成。施雨霜の出生年は不詳であるが，氏は施連登の弟である。
火灰埔村は龍湖鎮ではなく石獅市にある。年齢から出生年を算出する時は数え年で計算した。

④　施　家　羅（1903年～1951年）

晋江県前港村人。故郷の家族に対する公益事業にすこぶる心を砕いた。1946年尊道小学校を復興し，大いに力を尽くした。同年，施性水等と南僑中学を創設し，また同族の団結のため臨濮堂復興に参加し，献身的な力を尽くした。

⑤　許　志　北（1893年～1961年）

晋江県梧坑人。幼くしてフィリピンに渡り，商売をして裕福になった。同族の公益事業に対してできるだけ支持をし擁護をした。フィリピン陥落時，密かに地下抗日団体を支持し，全力を傾け，3回にわたり日本軍に拘禁されたが，勇気を失わず，尻込みしなかった。抗日勝利後，洪光学校復興の準備し，華商公報を発行した。権力を恐れなかったため，遂に陥れられ，冤罪が晴れず援助もなく，1961年に台北で逝去した。

(2)　30万元以上寄付の僑親

次に，僑郷に30万元以上を寄付した僑親57人のうち施姓24名を取り上げると，以下の者がいる。①施子清(1936年生，香港在住)，②施維雄(1914年，フィリピン)，③施至成(生年不明，フィリピン)，④施文種(生年不明，フィリピン)，⑤施連登(1906年，フィリピン)，⑥施教煥(1937年，香港)，⑦施至向(1903年，フィリピン)，⑧施教灿(1913年？，フィリピン)，⑨施世筑(1943年，香港)，⑩施雨霜(生年不明，フィリピン)，⑪施清漢(生年不明，フィリピン)，⑫施能忠(1928年，フィリピン)，⑬施性答(1925年，フィリピン)，⑭施順昌(1920年，フィリピン)，⑮施建徳(1920年，フィリピン)，⑯施教項(1923年，フィリピン)，⑰施議程(1922年，フィリピン)，⑱施性祥(1945年，フィリピン)，⑲施能灶(1929年，フィリピン)，⑳施教南(生年不明，フィリピン)，㉑施教柱(1935年，フィリピン)，㉒施成佳(1944年，フィリピン)，㉓施徳銘(1955年，香港)，㉔施灿悦(1915年，フィリピン)。

これらの30万元以上を寄付した華僑・華人の年齢・移民先・職業・寄付金額などを整理したのが第9表である。圧倒的多数がフィリピンの華僑・華人であ

第10表　1982年以降の前港村に対するフィリピン・香港華僑・華人の公益事業投資芳名録　（単位：1万元）

	非華同前郷港会	施家約	施教煥	施教項	施志強	施家宗	施振南	施夫恩	施清漢	施松柏	施家挺	施清□	施学概	施学夢	施家窗	施家栄	施清科	上辛公雑所	施学堅	施栄昌
学校経費	32																			
校舎建設	5	1.25	8.5	0.625	10			10	1.25	1.25	1.25						0.625		1.25	0.625
学校設備	0.5	4.5	4	0.35	0.5	0.7			0.7	0.15	0.2	0.21	0.8			0.2	0.21			0.8
教育基金		5	5.5	5	5	5.5	5.5		5	5	5	5.5	5.5			5	2.5		1.25	2.5
小　計	37.5	10.75	18	5.975	15.5	5.5	6.2	10	6.95	6.4	6.45	5.71	6.3			5.825	2.71		2.5	3.925
道路舗装				12.3	2		2.7	2	3.7	4	3	3		5	5.5		2.3	4.5		
用電設備	3						3.5							1.75	0.67				2	
祠堂・寺廟修築		0.275	0.8		0.25	1.7			0.05	0.075	0.25	0.56	0.8							
老人会所建設			5			10														
小　計	3	0.275	5.8	12.3	2.25	11.7	6.2	2	3.75	4.075	3.25	3.56	0.8	6.75	6.17		2.3		2	
合　計	40.5	11.025	23.8	18.275	17.75	17.2	12.4	12	10.7	10.475	9.7	9.27	7.1	6.75	6.17	5.825	5.01	4.5	4.5	3.925

	施救本	施承祖	施議泮	施家籍	施志追	施恭棋	施慈祥	施教永	施学連	施城内	施清太	施良標	施学忠	施閣塔	施閣苔	施文華	施閣喝	施清波	施教港	施教銭
学校経費																				
校舎建設	2.5	1.25	2.5	0.625		0.625	0.625		0.625				1.25	1.25	0.625	0.625	0.625	0.625	0.625	0.625
学校設備								3							0.04	0.04				
教育基金	1.25	2.5	1.25	2.5	2.5	2.5	2.5		1.25	2.5	2.5	2.5	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25
小　計	3.75	3.75	3.75	3.125	2.5	3.125	3.125	3	1.875	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	(1.925)	1.915	1.875	1.875	1.875	1.875
道路舗装					1				0.97											
用電設備																				
祠堂・寺廟修築	0.075			0.5		0.125														
老人会所建設																				
小　計	0.075			0.5	1	0.125			0.97											
合　計	3.825	3.75	3.75	3.625	3.5	3.25	3.125	3	0.845	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	(1.925)	1.915	1.875	1.875	1.875	1.875

	施教蛟	施並波	施学秦	施文明	施閣忠	施覚民	施学恭	施顕祖	施鳥甜	施家西	施家声	施良玉	施学智	施学満	施教澤	施学盾	施学塔	施文普	施家□	施閣錠	総計
学校経費																					32
校舎建設	0.625	0.625	0.31	0.31					1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	0.625				77.62
学校設備					1.5																15.41
教育基金	1.25	1.25	1.25	1.25		1.25	1.25	1.25													111.7
小　計	1.875	1.875	1.56	1.56	1.5	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	0.45				239.75
道路舗装																		1	1	1	54
用電設備																					11.89
祠堂・寺廟修築																					5.46
老人会所建設																					13
小　計																		1	1	1	86.35
合　計	1.875	1.875	1.56	1.56	1.5	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.075	1	1	1	326.08

出所）龍湖僑聯大厦5階にある「龍湖鎮華僑展覧室」の資料を筆写。□は不明字。（　）は計算が合わない数値。

第11表　1977年蘇坑村旅非華僑・香港同胞寄付者名簿

氏　名	金額（元）	氏　名	金額（元）	氏　名	金額（元）
施天涯	2万1000	施学源	1000	施学□	1万4000
施兆根	1万	施金隷	1万	施春鳴	1万
施文宣	4000	施学福	3000	施家叠	2000
施家僕	1500	施教協	1500	施家瑤	1万
施図串	1000	施家蔵	1000	施学琴	500
施学開	500	蔡月舜	500	施家傳	500
施図諒	500	施文碧	500	施天連	500
施学宗	500	旅港同胞	2万香港ドル		

出所）龍湖僑聯大厦5階にある「龍湖鎮華僑展覧室」の資料を筆写。□は不明字。

ることが分かる。彼らの大部分は，幼い時に両親や兄に連れられて，あるいは兄を頼って移民した一世であり，華僑・華人の子として現地で生まれた者は少ない。それゆえにこそ，故郷の思いは絶ちがたく，故郷とのパイプを残し，政治的困難な時は一時連絡が途絶えたものの，1970年代に入ると帰郷し，各種の活動を再開した。

さらに，各村レベルでの寄付者と寄付先について見てみよう。寄付者の名前は小学校の講堂などに写真入りで飾られているが，その他にも道路や橋や変電所・老人会所，祠堂や村廟のみを拾ってみると，第10表と第11表がある。まず第10表は銭江派施氏の代表村である前港村での寄付者で，1982年以降のフィリピンと香港からの寄付者とその寄付先・金額である。寄付の最大は教育関係で，続いて祠堂・寺廟の修築である。ここで寄付金を比較することは非常に難しい。というのは1982年から現在までの間に中国人民元は大幅に切下げられ，外貨交換レートは10分の1以下に減少した。それゆえ，いつ寄付しているかにより，寄付金の重みが異なる。第11表は蘇坑村のフィリピンと香港の華僑・華人の寄付である。

V．結　　語

福建僑郷の晋江市と龍湖鎮，さらには鎮下の村における華僑・華人の公益事

業投資と経済開発について，具体的に考察してきた。以上の華僑・華人の故郷でのパフォーマンスこそが地域社会における「華僑・華人ネットワーク」の実態である。

華僑・華人は解放前から故郷の親族や同族に対して経済援助を行うだけでなく，道路・橋梁建設，祠堂・寺廟修理等の公益事業投資を行ってきた。また，汽船やバス等の交通事業や電力等への投資も行ってきた。しかし，その投資主体は南洋華僑・華人であり，しかも一世に多く，台湾人は非常に少ない[43]。台湾人の公益事業への投資が見られないのは，解放前においては台湾は日本の植民地であったことも一因するが，台湾人にとり中国はすでに遠い存在となっていることである。福建省から台湾へ渡ってすでに200年〜300年が経過しており，多くの台湾人にとり故郷には親族や親戚がいない。また，いたとしてもその関係は非常に希薄になっている。1993年春の台湾からの帰郷訪問団について彼らの故郷を訪問したおりに，周りの台湾人に「あなたの故郷はどこですか」と尋ねると，「分からないので，この村を出身地にしてもらっている」という応答があった。台湾の族譜と中国の族譜を照らし合わせてみても，両者の系譜はつながらないことが多い。台湾人の一族が「祖国」中国へ里帰りし故郷で行事を行うのは，何よりも台湾での自分達の利害得失があるからである。すなわち，宗親会を組織し，団結をはかるのは，台湾の各種の政治的・経済的・社会的活動にとって有利であり，何よりも自己の出自を誇る面子の問題である。

これらの点を加味すると，フィリピンをはじめとした南洋華僑・華人の故郷への公益事業や営利事業投資は多く，台湾人の公益事業への投資が少ないという理由は明らかであろう。また，台湾資本の本地域への企業投資はまだ少なく，圧倒的多数は厦門に対してである。利益がなければ投資はしないという現実主義がここ見られる。

しかし，本地域からフィリピンへの移民の多くが，20世紀初から第二次世界

43）各村での寄付者名簿の中に台湾人は非常に少ない。この点は第7表からも明らかであろう。前掲『福建華僑档案史料（上）（下）』も参照されたい。

大戦までの時期であるため，現在も故郷に兄弟姉妹や甥姪が生存し，その関係は非常に強固である。彼らは移民先での差別や迫害の中で，苦労して蓄財し，故郷へ送金してきた。財をなした者は故郷に土地を購入したり，郷村建設に貢献してきた。しかし，土地改革により裕福な華僑は華僑地主（南洋地主）に階級区分され，土地や豪華な屋敷を没収された。その後，中央政府が華僑政策を変更しても，華僑・華人は屋敷を放棄したまま，里帰りはしていない。このような事例はあっても，多くの華僑・華人は解放後の政治的困難な時期も含めて故郷の親族に積極的に送金してきた。改革・開放後は郷村建設のために様々な寄付を行い，さらには小資本ではあるが，経済投資をも行ってきた。

しかし，このような華僑・華人と結びついた経済建設にも問題がないわけではない。それは，華僑・華人からの援助に依存し，僑郷側が自助努力で経済発展させようとする自立精神を喪失し，相変わらず「靠僑吃僑」（華僑に依存して生活する）状況を存続させている点である。

〔晋江県に関する参考文献〕

（雑誌論文，解放前に出版された統計資料・華僑関係，族譜・宗親会発行の資料は除く）

〔1〕荘為璣『晋江新志』（上冊第一分本，1948年1月）
〔2〕荘為璣『晋江新志』（1945年改編本，『晋江新志』初稿）
〔3〕林金枝・荘為璣『近代華僑投資国内企業史資料選輯（福建巻）』（福建人民出版社，1985年）
〔4〕『晋江南僑中学特刊1946-1986』（1986年）
〔5〕香港晋江同郷会『晋江』特刊編委会『晋江—紀念香港晋江同郷会成立一周年』（1986年8月）
〔6〕張瑞尭・廬増栄主編『福建地区経済』（福建人民出版社，1986年）
〔7〕菲華前港同郷会『尊道学校創立八十周年紀念特1909-1989』（1989年）
〔8〕呉徳厚『石獅巻』（中国沿海城市投資環境綜覧，華東師範大学出版社，1989年）
〔9〕福建省档案館編『福建華僑档案資料（上・下）』（档案出版社，1990年）
〔10〕曽閲・李灿煌主編『晋江歴史人物』（海峡文芸出版社，1991年）
〔11〕荘晏成・他編『泉州巻』（中国沿海城市投資環境綜覧，華東師範大学出版社，1991年）
〔12〕『晋江巻』（中国国情叢書一百県市経済社会調査，中国大百科全書出版社，1992年）
〔13〕晋江市龍湖僑聯編『龍湖僑聯—綜合報道専輯』（1992年8月）

〔14〕厚澤小学校慶籌備委員会『福建省晋江 厚澤小学建校二十周年暨教育学楼落成慶典専輯』（1992年）
〔15〕晋江帰国華僑聯合会編『晋江僑郷』（亜洲晋江社団聯合会成立一周年・晋江県帰国華僑聯合会成立四十周年紀念特刊，1992年10月）
〔16〕福建省統計局編『福建統計年鑑1992』（統計出版社，1992年）
〔17〕厦門大学南洋研究所資料室編『東南亜研究論文索引1980年—1989年』（厦門大学出版社，1993年）
〔18〕福建省地方志編纂委員会『福建省志：華僑志』（福建人民出版社，1993年）
〔19〕中国共産党晋江市委員会・晋江市人民政府編『僑郷之光—晋江建市紀念特刊』（1993年5月）
〔20〕林金枝主編『華僑華人与中国革命和建設』（華僑華人研究叢書，福建人民出版社，1993年12月）
〔21〕郭碧良『石獅—中国民辦特区』（福建人民出版社，1994年2月）
〔22〕呉泰主編『晋江華僑志』（上海人民出版社，1994年2月）
〔23〕晋江市地方志編纂委員会編『晋江市志（上・下）』（上海三聯書店，1994年3月）
〔24〕晋江市地方志編纂委員会編『晋江市人物志』（上海三聯書店，1994年3月）
〔25〕「福建経済年鑑」編纂委員会編『福建経済年鑑1985』『福建経済年鑑1986』『福建経済年鑑1987』『福建経済年鑑1989』『福建経済年鑑1991』『福建経済年鑑1992』（福建人民出版社，1985年，1986年，1987年，1989年，1991年，1992年）
〔26〕中国人民政治協商会議福建省晋江市委員会文史委員会編『晋江文史資料選輯』（第1輯～第15輯）
〔27〕中国人民政治協商会議福建省石獅市委員会文史委員会編『石獅文史資料選輯』（第1輯～第2輯，1992年3月・1993年3月）
〔28〕『晋江郷訊』（晋江郷訊社，第36期～第110期）
〔29〕『石獅僑報』（石獅僑報社，第1期～第15期）
〔30〕『晋江』編集部編『晋江』（香港晋江同郷会，第1期～第8期，1994年6月1日）
〔31〕『華僑歴史論叢』（福建華僑史学会）
〔32〕『南洋問題』（厦門大学南洋研究所）
〔33〕『泉州晩報』
〔34〕『福建僑報』